

4．水害と治水事業の沿革

4 - 1．既往洪水の概要

大淀川流域の年雨量は約2,800mm程度であり、洪水の原因は8月～9月に発生する台風に伴う降雨によるものが多い。

大淀川の主要な洪水は昭和29年9月洪水、昭和57年8月洪水、平成5年8月洪水、平成9年9月洪水等であるが、昭和29年9月洪水は計画流量の改定の契機となった洪水である。

(1) 明治13年(1880年)8月3～5日洪水

8月3日から降り出した雨は、4日から5日には暴風雨となり、大洪水を引き起こした。

その状況について公文録(県から政府に出した報告書)に、以下のように記述されている。

「増水の高さ2丈(6m)又は3丈(9m)あまりにもなって、堤防や道路の破壊、橋の流失破損、田畑の荒損、家屋の流失等、この数十年来まだ見たこともないほどの大水害で、人や牛馬の溺死もでた。」

(「大淀川の歴史」より)

(2) 大正元年(1912年)10月2日洪水

10月2日の台風による暴風雨は、県内に死者44人、負傷者19人、行方不明者3人、家屋の全壊822戸、半壊588戸、家屋の浸水9269戸という被害をもたらした。

(「宮崎県災異史」より)



大正中期ごろの大淀川の氾濫(旭通り)

(3) 昭和29年(1954年)9月10~13日洪水

台風12号の接近により、9月10日より降り始めた雨は12~13日に豪雨となり、総雨量は平野部で250~300mm、山地部で700~1000mmとなった。

河川の水位は12日夕刻、各地点共指定水位に到り、13日早朝、各々警戒水位に達するという異常な増水記録を示し、高岡町を始めとする中流各地域、及び下流の宮崎市内には13日12時~13時に沿岸住民に対する避難命令が発令された。

この大洪水によって、浦之名川合流点付近、及び高岡町狩野の一部は濁流にのまれ、大丸橋右岸取付道路約20mも13日18時頃の流失、下流では高松橋が13日18時頃流失、小戸橋も高松橋の流失橋材の為流失した。

宮崎県下の被害状況は、死者51人、負傷者62人、行方不明者13人、流失全壊家屋614戸、半壊683戸、床上浸水5906戸、床下浸水8228戸であった。(被害数は宮崎県災異史より)



提供：宮崎日日新聞社

< 昭和29年 9 月洪水 >

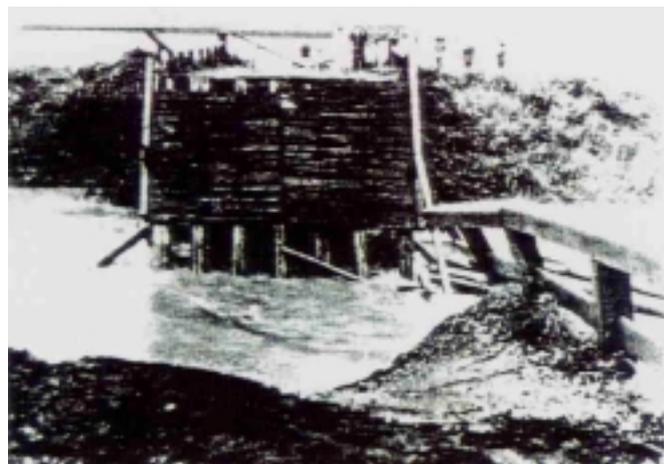


右岸大塚町付近の浸水状況（宮崎市）



流出寸前の赤星橋
（都城市）

源野橋の流失
（都城市・横市川）

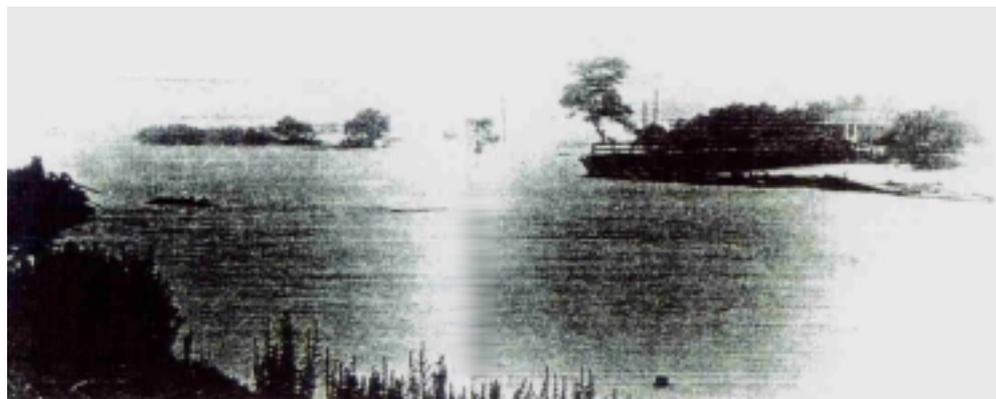


< 昭和29年9月洪水 >



軒先まで浸水した家
(高岡町)

流出した高松橋 (宮崎市)



流出する二巖寺橋 (都城市)

(4) 昭和57年(1982年)8月25~27日洪水

台風13号が宮崎市付近を通過し、日向灘を北上したため、宮崎県下全域は暴風雨域に入り、25日~27日にかけて各地で大雨を降らした。

大淀川上流の三股で51mm、青井岳45mm、本庄川上流の田代八重42mm、須木44mmの時間雨量を記録し、総雨量も三股642mm、青井岳492mm、田代八重558mm、須木439mmとなった。

河川の水位も、26日22時には宮崎観測所で警戒水位3.70mを突破し、27日6時には最高水位5.40mを記録し、支川本庄川の嵐田観測所でも警戒水位3.60mを突破し、27日4時には最高水位5.24mを記録した。

流域では人的被害はなかったものの、家屋半壊18戸、床上浸水264戸、床下浸水463戸におんだ。



提供：宮崎日日新聞社

< 昭和57年8月洪水 >



下小松地区
(8/000右岸付近)
浸水状況

下小松地区
(8/000右岸付近)
浸水状況



下小松地区
(8/000右岸付近)
浸水状況

(5) 平成5年(1993年)8月1~2日洪水

前線の活発化に伴い、九州南部地方は大雨となった。大淀川流域では7月31日1時ごろより降り出した雨が断続的に降り続き、1時間に岳下で62mm、青井岳63mm、樋渡69mm降ったのを始め、8月1日の16時から17時の1時間に83mmを最高に流域全般で大雨が降り続いた。また、総雨量でも巢之浦の699mmを最高に、樋渡605mm、四家534mm、御池661mm等の降雨があり、最大3時間雨量でも樋渡の175mmを最高に、比曾木野166mm、御池152mmを記録した。

今回の8.1豪雨による降雨は流域全般にわたり大雨となり、各水位観測所で警戒水位を越す出水となった。

この洪水による被害は死者1人、負傷者2人、家屋の全壊12戸、半壊2戸、床上浸水771戸、床下浸水789戸におよんだ。



提供：宮崎日日新聞社

<平成5年8月洪水>



青柳川流域
大塚町
高松橋方向を望む
(PM15:00)



小松地区

(6) 平成9年(1997年)9月12~16日洪水

台風第19号の接近に伴い宮崎県全域が大雨となった。

大淀川流域では9月14日1時頃より降り出した雨が断続的に降り続き、16日1時頃より雨は強まり、1時間に末吉で27mm、比曾木野で35mm、青井岳で36mm、また、三股では16日2時から3時の間に69mmを最高に大淀川上流域全般で大雨が降った。また、3時間雨量でも巢之浦137mm、霧島176mm、三股179mmを記録し、総雨量では青井岳515mm、槻木469mm、霧島836mm、三股873mmを記録した。

この雨により、大淀川全川で警戒水位を突破し、最高水位が岳下で5.31m、高岡で7.08m、柏田で8.22mと過去最高の水位を記録した。

関係市町村の被害は、死者2人、負傷者3人、家屋の全・半壊25戸、床上・床下浸水は985戸に及んだ。



提供：宮崎日日新聞社・西日本新聞社

<平成9年9月洪水>



大塚地区

福島地区



高岡地区

<平成9年9月洪水>



高岡小山田地区

瓜田地区



表4-1(1) 既往洪水一覧表

洪水年	出水概要	水文状況			被害状況
		日雨量	最高水位	流量	
S11年 7月22～23日 (暴風雨)	台風が九州西部の海上を通過した影響で宮崎県では22日朝から23日にかけて強い雨が断続的に続いた。県下の雨量は、西米良から都城盆地にかけて最も多く400mmを記録し、宮崎では最高水位5.58mに達した。大淀川では高松橋が流出し、本町橋が破損する等、流域内で大きな被害が生じた。	柏田上流域 266mm 嵐田上流域 296mm	宮崎 5.58m 柏田 6.00m 高岡 6.60m 嵐田 6.10m	柏田 不明 嵐田 不明	県下の被害 死者 3名 負傷者 2名 家屋全壊 6戸 家屋半壊 7戸 家屋流出 7戸 家屋浸水 5173戸
S18年 9月18～20日 (台風26号)	台風26号が宮崎県に接近して、日向灘を北上したため、18日昼近く頃から20日にかけて各地に大雨をもたらした。各地点の雨量は都城447mm、宮崎494mmを記録し、流域では莫大な被害が生じた	柏田上流域 342mm 嵐田上流域 303mm	高岡 7.69m 嵐田 6.28m	柏田 不明 嵐田 不明	県下の被害 死者 114名 負傷者 161名 行方不明 1名 家屋全壊 567戸 家屋半壊 1165戸 家屋流出 508戸 床上浸水 9361戸
S24年 8月14～16日 (台風9号)	台風9号が九州南部に接近し、都城盆地を通過したため、宮崎県では15日夜半頃から風雨が次第に強くなり、14日より降り始めた降雨は都城435mm、須木755mmを記録した。台風9号は九州南部に上陸した後、非常に遅い速度で進行したため、大淀川では風雨による被害が甚大であった。	柏田上流域 253mm 嵐田上流域 346mm	高岡 6.02m	柏田 不明 嵐田 不明	県下の被害 死者 7名 負傷者 15名
S29年 9月10～13日 (台風12号)	台風12号の接近によって、宮崎県では11日午後から風雨が次第に強くなった。9月10日より降り始めた降雨は都城で679mmを記録し、各地点の水位は13日早朝に警戒水位に達した。大淀川では増水のため、小戸橋、高松橋が流出し、ところどころで築堤が決壊して、流域では多大な被害が生じた。	柏田上流域 253mm 嵐田上流域 308mm	岳下 4.55m 高岡 7.77m 宮崎 6.40m 嵐田 5.52m	柏田 不明 嵐田 2399m ³ /s	死者 5名 負傷者 10名 家屋全壊 72戸 家屋半壊 215戸 家屋流出 28戸 床上浸水 3173戸 床下浸水 5303戸
S46年 8月26～30日 (台風23号)	台風23号による降雨は宮崎県の南部では27日早朝から始まり、30日に台風が通過後まで続いた。尾鈴山系及び鰐塚山系で1000mmを越える豪雨になった。上流岳下で29日18時に4.45m、中流高岡で29日23時に5.20m、下流宮崎で30日3時に5.50m、支川本庄川嵐田で30日4時に4.32mの最高水位を記録し、警戒水位を大きく上回った。	柏田上流域 230mm 嵐田上流域 414mm	岳下 4.45m 乙房 6.60m 高岡 5.40m 柏田 7.59m 宮崎 5.50m 嵐田 4.32m	柏田 5353m ³ /s 嵐田 2123m ³ /s	負傷者 4名 家屋全壊 4戸 家屋半壊 6戸 床上浸水 294戸 床下浸水 1083戸
S57年 8月24～27日 (台風13号)	台風13号が宮崎市付近を通過し、日向灘を北上したため、県下全域が暴風雨域に入り、25～27日にかけて各地に大雨を降らした。大淀川上流の三股51mm、青井岳45mmの時間雨量を記録し、総雨量も三股642mm、青井岳492mmを記録した。大淀川上流地区の水位は、26日15時頃から次第に上昇し始め26日22時には最高水位4.50mを記録した。支川本庄川の嵐田でも、27日4時には最高水位5.24mを記録した。	柏田上流域 285mm 嵐田上流域 383mm	岳下 4.50m 乙房 6.66m 樋渡 8.75m 高岡 6.36m 柏田 8.13m 嵐田 5.24m	柏田 7136m ³ /s 嵐田 2243m ³ /s	家屋半壊 18戸 床上浸水 264戸 床下浸水 463戸

表4-1(2) 既往洪水一覧表

洪水年	出水概要	水文状況			被害状況	
		日雨量	最高水位	流量		
H 1年 7月24～ 8月3日 (台風11号)	台風11号が九州の南部に上陸し、西部海上を通過したため、台風をとりまく東側の非常に強い雨雲が県内に入ってきた。27日午後から次第に雨脚が強まり28日0時から9時までに鰐塚山272mm、都城232mm、宮崎200mmを記録する豪雨となった。大淀川上流の水位は27日22時頃から次第に上昇し始め、岳下では28日4時30分に警戒水位を突破し、28日8時に最高水位4.45mを記録した。また、支川本庄川の嵐田では28日3時に警戒水位を突破し、28日8時に最高水位5.41mを記録した。	柏田上流域 292mm 嵐田上流域 383mm	岳下 4.44m 乙房 7.14m 樋渡 8.40m 高岡 5.97m 柏田 7.74m 嵐田 5.41m	柏田 6123m ³ /s 嵐田 2365m ³ /s	家屋半壊 62戸 床上浸水 79戸 床下浸水 323戸	
H 2年 9月27～29日 (台風20号)	台風20号が九州の南部をかすめて日向灘を北上したため、強雨域が県の中・南部に広がり、時間雨量は宮崎で18時に68mmを最強に、1時間20～60mmの強雨が6～7時間続いた。大淀川上流の水位は9月29日13時頃から次第に上昇し始め、岳下では29日19時には警戒水位を突破、29日19時には最高水位4.91mを記録、高岡でも29日17時には警戒水位を突破し、21時最高水位7.17mを記録した。	柏田上流域 183mm 嵐田上流域 122mm	岳下 4.91m 乙房 7.49m 樋渡 9.61m 高岡 7.17m 柏田 7.75m 嵐田 4.21m	柏田 6254m ³ /s 嵐田 961m ³ /s	行方不明者 1名 負傷者 5名 家屋全壊 2戸 家屋半壊 57戸 床上浸水 1187戸 床下浸水 1908戸	
H 5年 7月31日 ～8月2日 (前線)	前線の活発化に伴い、九州南部地方では大雨となった。大淀川流域では7月31日1時頃より降り出した雨が断続的に降り続き、1時間に岳下で62mm、青井岳63mm、樋渡69mm降ったのを始め、8月1日の16時から17時の1時間に83mmを最高に、流域全般で大雨が降り続いた。また、総雨量でも巢ノ浦の699mmを最高に、樋渡605mm、四家534mm、御池661mm等の降雨があり、最大3時間雨量でも樋渡の175mmを最高に比曾木野166mm、御池152mmを記録した。今回の8.1豪雨による降雨は流域全般にわたり大雨となり、各水位観測所で警戒水位を越す出水となった。	柏田上流域 245mm 嵐田上流域 253mm	岳下 4.90m 乙房 6.55m 樋渡 9.67m 高岡 7.24m 柏田 8.10m 嵐田 4.45m	柏田 7016m ³ /s 嵐田 1459m ³ /s	死者 1名 負傷者 2名 家屋全壊 12戸 家屋半壊 2戸 床上浸水 771戸 床下浸水 784戸	
H 9年 9月14～16日 (台風19号)	台風19号の北上に伴い、宮崎県全域が大雨となった。大淀川流域では9月14日1時頃より降り出した雨が断続的に降り続き、16日1時頃より雨は強まり、総雨量では青井岳515mm、槻木469mm、霧島836mm、三股873mmを記録した。今回の台風19号による豪雨による降雨は、大淀川上流域を中心として大雨となり、岳下、高岡、宮崎、嵐田のすべての基準地点で警戒水位を大幅に越す大出水となった。	柏田上流域 249mm 嵐田上流域 273mm	岳下 5.28m 乙房 7.58m 樋渡 9.90m 高岡 7.07m 柏田 8.21m 嵐田 5.23m	柏田 6875m ³ /s 嵐田 1921m ³ /s	死者 2名 負傷者 3名 家屋全壊 1戸 家屋半壊 24戸 床上浸水 401戸 床下浸水 584戸	

4 - 2 治水事業の沿革

大淀川における明治以前の治水事業は、舟路維持をかねて下流部を中心にごく僅か行われたが、その後明治・大正にかけてもみるべき事業はなかった。

本格的な改修工事は昭和2年に直轄事業として着手したことに始まる。

昭和2年に着手した第一次工事は本庄川合流点下流で計画高水流量を $5,500\text{m}^3/\text{s}$ とするものであったが、相次ぐ戦争により予定どおりの進行がみられず、昭和18年9月の直轄事業着手以降最大の洪水により大災害を被った。

第二次工事は昭和18年9月の洪水をきっかけとして、都城市を中心とした上流域の直轄改修区域を追加するとともに、従来の築堤に加え下流部に導流堤及び突堤を施工した。

昭和28年に全川にわたる計画の再検討を行い、計画高水流量を宮崎地点で $7,000\text{m}^3/\text{s}$ 及び樋渡地点で $4,000\text{m}^3/\text{s}$ とそれぞれ改定した。その後の昭和28年西日本を襲った洪水を契機に綾南（昭和33年竣工）、綾北（昭和35年竣工）の両多目的ダムを建設などの第三次工事を行った。

昭和39年に着手した第四次工事は昭和29年8月及び9月の相次ぐ台風の来襲により、甚大な被害が発生したことにより、宮崎地点における基本高水のピーク流量を $7,500\text{m}^3/\text{s}$ とし、このうち既設2ダムに加え新たに岩瀬ダムを加え、計画高水流量を $7,000\text{m}^3/\text{s}$ とし、捷水路の施工及び水衝部への護岸の設置に着手した。

この後、新河川法の施行により、第四次工事を踏襲する形で昭和40年4月に工事実施基本計画が策定された。

この計画に基づき、岩瀬ダムの建設（昭和42年竣工）及び築堤を中心とした改修を進め、現在に至っている。